

# せたかむい

発行・古平町史編纂室  
古平町文化会館 ☎42,2590  
第138号・平成13年3月1日

## 金まて読む

### 古平の歴史

《45》

#### アワビ漁 (続き)

昔からアワビは高価なものでしたが、ほとんどは干アワビに加工され、長崎俵物として移出されていました。

●串アワビ 丸竹の串にアワビ五個を刺し、天日で乾燥する。色は黒色で、十串で一連。

●白干 生アワビを煮て塩をふり、ねかせてから乾燥する。

●生アワビの塩漬 二斗樽に約五百個を漬け込む。

アワビはヤスで突いて採っていましたが、以前は唐ぐわでかき集めるほど、それほどいたといわれています。ヤスで突くと貝を傷つけるので、その後は鉤(かぎ)で引っかけて採るようにな

りました。その時にガラス箱(箱めがね)を使って採りましたが、この便利なガラス箱が発明されたのは明治十五年ころだと伝えられています。

明治七年、開拓使古平郡出張所管内の干アワビの生産量は次のようでした。

古平郡 一二〇〇貫 (七〇〇キ)  
美国郡 一二八貫 (四八キ)  
積丹郡 四三五貫 (二六三キ)

明治三年には、これらの魚介類も次第に減少してきて、古平郡の生産量は九〇貫(三六キ)にまで落ちてきました。このような傾向は沿岸各地にも見られるようになり、北海道庁では明治四三年、魚介・海藻類の繁殖と保護を図るため、古平・美

国・増毛・歌棄の各町村にアワビ禁漁区を設けることや、貝の寸法により採取を制限するなどの指導を始めました。

このころはまだ干アワビを生産をしていて、小樽港を経由して、現在の中国などへ輸出していました。

明治四三年 一二〇キ 三三両

明治四五年 四八〇キ 六五両

また大正の初めころ、アワビ漁をしていたのは磯舟十隻で、漁の期間は十月一日から翌年一月三十一日まででした。

古平町でもアワビの生産は毎年減収の状態が続き、その繁殖の様子もよく知られていなかった。大正十四年、古平漁業組合では北海道水産試験場の指導を受けて、アワビの生長やその移動状態を調査し、その増殖と生産の向上に期待して、調査費を三十円計上しましたが、その後については不明です。

大正十五年、古平漁業組合は、組合規約のうちアワビについて次のように規約を変更し、その理由を述べています。

現在のアワビ漁期

十月一日〜翌年一月三十一日  
改正 九月十六日

翌年二月二十八日

「現在、本組合デノ鮑漁業時期ハ荒天ノ日ガ多ク、従ツテ出漁モ思イ通りニナラズ、ソノ上、鮑ノ生産価格ガ最も低イ時ナノデ、大変鮑漁業ニトツテ不利デアッタ。又、今マデハ隣接スル余市漁業組合ト漁業時期ガズレテイタメ、シバシバ取り締マリノ上デモ不都合ナ点ガアツタ。今後、一層鮑ノ永年禁漁区域ノ取り締マリヲ嚴重ニシテ鮑ノ繁殖ヲ図ルヨウニスレバ、先ニ述べタヨウナコトガ改善サレルモノト考エラレル。」

＊(言葉づかいなど書き替え)

この中にある永年禁漁区については、明治四十三年に定められた禁漁区がそのまま永年禁漁区となりました。

この禁漁区の一つが丸山岬突端にある通称『三番岩』付近でしたが、ここは落石の危険があり、また潮流が早いことから海水浴をする者もなく、監視人もおりませんでしたので、その後も禁漁区として守られてきました。

年が改まると何となく気分も新たに、そして、「今年こそ日記を——」と、ひそかに決意はしたものの、どうも空白のまま終わってしまうことが多いようです。紙上でご紹介してきた高野名幸作さんの日記は、六十年余り、旅行や病気でもない限り毎日書き続けて来られたものです。

特別の地位や有名人などであれば、自分の死後、たぶん日記が公開されるであろうことを予想し、自分に関係するようなことは多少は甘く？なるものですが、この日記は、身辺や世上のことについて実に淡々と書かれています。今ではその当時のことを知る、まことに得難い貴重な資料であるといえます。

## 大正七年

12/13 古英丸は七、八日も通わぬ、タラは時化で出られないが、出漁すれば二百円からの水揚げがあるので、意気込みが違う、鮮魚の値段が全般に高い。

12/14 タラ、カレ網が出漁する、伊之君が屋根の雪下しをしているが、この時期としては珍しいことだ。

12/15 時化で古英丸、末広丸ほか一隻が湾内にいる古平の湾は天然の良港だが、これに築港が出来れば良い港

## 大正7年12/13〜大正8年3/31

### 高野名幸作さんの日記から

### 当時の世相を見る

【39】

になるだろう、沖村へ所用で行ったがなかなか良い道路になっ

12/16 古平でも無尽会が恐ろしいほど沢山できていて、内幕はやり繰りで大変らしい、明年夏ころには問題が起きそう

12/26 初売りも近づいたので店の整理をする、四、五十台の馬そりが鉾石の運搬をしているが、一日四、五円の稼ぎになるというので景気がよい。町外からも来ている。

行き、甲寅会のことについて協議する。

12/20 このごろ稲倉石鉾山からの鉾石の運搬で、馬具類がよく売れる、今井さんの老婆が亡くなったので弔いに行く、九十三歳の長寿とはめでたい。

12/23 久しぶりのナギでタラ、カレ網が出漁する。年末で値段も良いので漁師連中も威勢がいい。

12/25 父は火防組合の見

## 大正八年

1/1 (次ページにあり)

1/2 昨日からの雨が吹雪に変わった、例年なら二時、

三時ごろからガヤガヤ歩く客もこの分だといないだろう、七時ころ店を開けたが、九時ころ網の客が来て三時ころまで客が切れない、この天候にしては意外だった、この日の売上げ一、五一〇円で、昨年より三〇〇円も多く、一昨年の倍であった。

1/3 近年稀な寒気で室内にいても顔が冷たい、朝のうちは晴れていたが、昼前から急に吹雪になりカレ網は戻った、昨日はせっかくの売り出しだったが景品にする物が無くなって困った。

1/7 綿糸相場も先安のようだが、一般の客も買い控えている、美国や新地の店ではずいぶん勉強しているようだ、家でも値段を改正した、十年ほど前は百人一首がずいぶん盛んだったが、このごろはさっぱりだ。

1/11 朝、海岸へ出て見ると上ナギである、今年はお漁



した日が少ないが、値段がよいので水揚げがある、ひとナギで五十〜六十円、よい人は百円ぐらいだという、店も忙しくなった、今日は※帳祝い、酒肴を出す。

※帳祝い(ちよういわい) 〓

帳祭(ちようまつり)ともいいますが、商家では正月の十一日(または四日)に、新しい年を迎えて帳面を改め、作り直しますが、それを祝う行事です。

× × ×

一月一日 快晴 三十八度

愈大正八年の初春を迎ひた。熊さんハ五時に起き若水を汲(汲)ミ支度春(す)る。予ハ六時半ニ起床、漸く(久)夜か明けたば可里、礼服用用宮詣り二行く。西の宮神社に参りて神酒を頂き、后(後)、新地郷社へ参詣する。本年家内安全、商売繁昌を祈った。后、正、五、銀行、八、三、四等々に廻礼、帰りたハ九時、今日は珍しい静か奈(な)空、而して海もナギ、元旦日和ダ、朝食し十時ニ学校拝賀式ニ参列す。両陛下の御写真を拝す。十一時交礼会に列す。スルメハ昨年不

漁ノ為變つてカマボコを付けタ  
帰りは十二時、中食后、店務  
を執り、后、近所二、三軒ニ廻礼  
す、夜ハトロロノ馳走阿る。

× × ×

昔の人は、手紙や日記などの私的な文書はもちろんのこと、明治時代でも、公文書であつても平かなと片かなが混じり、変体がなも使われていました。それに当て字などは全く気にしないで、筆を持つては自由自在に

書いていたようです。なにか書くことを楽しんでいた、という

ようなところさえ見られます。

町へ出て看板などを見ても、

外国語や片かなの横文字に混じ

つて、寿司・天麩羅・天婦羅・

志留古・楚者などのように、変

体がなで書かれた看板やのれん

があつて、風流な遊び心が昔か

らの文化を今に伝えています。

文字を書くというおもしろさが

伝わってくるようです。

1/12

タラ漁も値段が

高いので、漁師は皆景気が良

い、網類も大口で出る、薄利

で出すので売れ行きも良い、

これからも薄利多売を信条と

すべきだ。

1/19

晴天でナギ、漁

船は皆出漁した、カレ網は大

々漁で、戸沢六百貫(二・二ト

ン)、田四百貫、外も三百貫

ぐらいとったという、この値

段の高い時に実に大々漁だ。

日 一 月 一 日 一 十 月 午 戊 日 九 十 二

|           |                                                                                                                                                                                                                                 |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 無題<br>三十八 | <p>大正八年の初春を迎ひた。熊さんハ五時に起き若水を汲(汲)ミ支度春(す)る。予ハ六時半ニ起床、漸く(久)夜か明けたば可里、礼服用用宮詣り二行く。西の宮神社に参りて神酒を頂き、后(後)、新地郷社へ参詣する。本年家内安全、商売繁昌を祈った。后、正、五、銀行、八、三、四等々に廻礼、帰りたハ九時、今日は珍しい静か奈(な)空、而して海もナギ、元旦日和ダ、朝食し十時ニ学校拝賀式ニ参列す。両陛下の御写真を拝す。十一時交礼会に列す。スルメハ昨年不</p> |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

# 北海道・樺太・千島を探険

## 最上徳内

## 蝦夷草紙

9

を読んでみましょう

### 牛馬飼育のこと

松前周辺では牛馬を飼育するときは、野に放しておく。夏より秋は青草、枯草もあつてこれを食べているが、冬になると食い物が少なく、雪が降つてくるとススキの穂の雪から出ているところを食べている。雪が深くなり、ススキも食べられなくなると海岸に出て、波に打ち寄せられた海藻を食べている。このときに馬を矢来（やらい）柵のようなものの中に集めて、干草を与えて飼うが、これは秋のころから刈つて干しておいたヨモギの混じつたカヤである。

このような飼育方法だが、馬の頑強なることすさまじい。馬がいなくなるときは□□□□（文字が不明）に似ている。日本国内の馬の

いなくのとは違う。馬を扱うときも轡（くつわ）をかけず、足には沓（くつ）蹄鉄（ていてつ）もつけない。これで山坂や海岸の石原、岩場を歩かせている。手綱も使わず、声をかけたり、後ろからむちで打つたり、あるいは小石を投げつけたりして使う。

私が山々を歩いていたとき、喜古内（木古内）という所に一泊したことがある。翌朝、馬を頼んでおいたが馬がいらない。宿の主人の言うには、野放しにしていた馬をつないでいたところ、手綱を切つてどこかへ逃げてしまい、その辺に見当たらないという。

そこへちやうど人が通りかかつて、その馬なら、ここから二里ほど離れたところの沢の辺りにいたという。早速捕らえて来たので、まずはその馬に乗って行つた。

荷物を運ぶアイヌを見ていると、一人で馬を五頭ほどもつないで連れていく。曲がりくねつた険しい山道を通り、やがて海岸に出ると、一人のアイヌがちよつと待つてくれという。すると彼は、なぎさ近くにいた馬の側に駆け寄り、馬を見ながらしきりになで回している。そして戻つて来たので、どうしたのかと聞いたところ、その者の持ち馬の二頭が野放ししておいたところいなくなり、どこを探しても見当たらない。あそこにいる馬がよく似ていたので行つて見たが、違う馬であつたという。あるいは熊に襲われたのかも知れないという。

このように自由に飼育しているからこそ、あのような頑健な馬に育つのであろうか。

牛は銭亀沢というところに少々飼育されているだけで、ほかでは見ることはできなかった。

【注】馬の移入Ⅱ馬が初めて蝦夷地に移入された年代ははっきりしていない。今から四〇〇年ほど前に松前の藩主が、津軽家から馬を一頭贈られたという記録がある。それから百年ほど後に、松前

藩から幕府に馬を二頭献上したことがある。

当時の馬の飼育法はここに書いてあるようにいたつて簡単であつたので、その後、大いに繁殖したという。二五〇年ほど前には亀田郷中の馬だけでも八九三頭もいたという。馬の体格は次第に矮小になり力量はなかつたが、強健で粗食にも耐え、荷駄用として適していた。しかし、乗用としては不適當であつたので、乗馬は多く奥羽地方から移入していたという。

牛の移入Ⅱ牛のことについては貞享元年（一六八四）四月、白牛が東部白神海岸に到着したのが最初とされている。天明・寛政のころ（一七八一〜一八〇〇）は、東部銭亀沢・石崎村などで飼育されていたという記録があるのを見れば、飼育され始めたのはそれほど遠い昔ではないようである。





断章小説「ふるさと遙か」 第20編

乱気流の中で

吉 川 義 雄

夜の函館は吹雪いていた。北に向かう汽車は、出発まで二時間近くもあり、友野は孤独のやるせなさに押し出されるようにして、ふらりと駅舎を出た。

地吹雪の中に何軒かの屋台の灯りがあつた。「ラッしゃい」と老夫婦に暖かく迎えられるも、足許からかみついてくる寒気を足踏みしてよけながら、おでん鍋の中を、無感動な彼の目が何かを探していた。

串刺しのイカをかじりながら、友野は突然アツと声を出した。「松風町は遠いんですか」「歩いて行けば遠いよ」

札幌で別れたルミ、父親の転勤で私も函館に行く。松風町というところだと便りをもらっていたのだ。何という迂闊さ、今このまちに彼女が居るのだ。「逢いたい」人恋しさのつる

夜の焦燥の中で、友野は渾水をすすりあげながら涙を流した。

日本は狂ったように暴走を始めていた。満州から北支に戦火を進め、遠い昔から文化の恩師であつた大恩ある国に、忘恩の限りをつくし始めていた。止まることが知らない大陸での戦争拡大を「支那事変」と呼称し、「聖戦」の名でごまかし、青春真つただ中の若者たちが動員されて行つた。世界からの怨嗟に抗して国際連盟から脱退、ナチドイツとファッショイタリアと三国同盟を結んで、日本は完全な軍事独裁の国になつていた。政党は解体され、全議員は「大政翼賛会」に埋没させられた。本来、権力に抗して人民を守る立場にあるマスコミも、心ある者は筆を折り、残りは軍部の宣伝屋に墮落してしまつた。

宗教界も自己の教義を曲げて軍の都合に追従した。たまたま神道受入れを拒否した大本教・創価学会・キリスト教団の一部は見るも無残に弾圧され、獄死の憂き目さえみえた。

歯止めのかなくなつた日本の狂気に合わせ、欧州にも世界大戦の軍靴の響きが高鳴り始めていたし、太平洋も波濤が押し寄せ、勢いを増して来ていた。

日本国内の平和産業は、軍部にとつて不要な存在となつていった。国内に二つの訓練所を設け、不要とみなされた職業、職場から毎月数千人ずつの人たちを抜きとり、訓練後は直ちに軍需産業に送り込んでいた。

東京小平村にある東部国民勤労訓練所に友野が収容されたのは、十二月始めの寒風が枯草を吹き上げているころであつた。

陸軍から屈強な下士官たちが来ていて、収容された人たちは、その日から番犬に追われる羊のように追いまくられた。

友野に苦痛は無かつた。若かつたし、何よりも負けることが厭であつた。ただ、神道で統制

している訓練の中で、真夜中の水槽の中に首まで沈められ、「流汗鍛錬、同胞相愛」とかの訳の分からぬ言葉を数回唱えさせられる、バカげた禊(みそぎ)の時だけはこたえた。十二月の真冬の水は骨まで寒さがさつてきた。

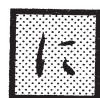
隔絶された一か月が終わるころ、訓練済の人員を少しでも多く連れて行くこうとして、人買いみたいな軍需工場の数十社が講堂に机を並べて待機した。

友野は今回の訓練生の中で、陸軍中將の肩書きのある所長名で三人の表彰者の中に居た。

当然どここの会社からも引つ張られ、待遇も良かったが、彼は表彰者の榮譽を逆手にとつて、軽々しい就職を断り続けた。一度故郷に帰ってから決めますと、頑として彼は訓練所の門を出ることに成功した。

津軽海峡は荒れていた。大晦日を明日にして、函館からの夜汽車を待つ身に、故郷はなお遠かつた。年が明けてすぐ、友野に召集令状が追いかけて来た。

(この稿終わり)



# ——古平いろはうた——

## 鯨群来ソーラン節の大合唱

ソーラン節は鯨漁で、船の底に鯨の入った大きな網袋を吊り下げた杵船から、汲み船と呼ばれる船へ、大きなタモで鯨を積み替える、これを鯨を汲むと言っています、このときに歌われる囃子(はし)です。

杵船、または単に杵といわれるこの方法は鯨漁では画期的な発想で、安政二年(一八五五)、群来村の秋元金四郎が考案し、二年後の安政四年、同じ群来村の白岩八右衛門が、それを直接船に吊り下げるように工夫したものです。当然、ソーラン節の歌われたのはそれ以後ということになります。

鯨漁では、建網の中に入った鯨を杵網に追い込むことを網起こしといいますが、その時に歌われるのが『網起こし音頭』で、それをさらに汲み船に移し替えるときに歌われるのが『沖揚げ音頭』です。



戦時中から戦後にかけて、この『沖揚げ音頭』に三味線などで伴奏をつけ、「ソーラン、ソーラン：：」という掛け声から『ソーラン節』という曲名になり、全国的にも広く知られるようになったといわれています。しかし、ソーラン節はもともと激しい肉体労働と、厳しい海

⇐ 大漁で力の入る網起こし ⇐

の上での労働の唄でしたから、歌詞はともかくとして勇壮で豪快さがありました。舞台や座敷で歌うには本来の唄の持つ味わいが消えてしまいます。それで、ソーラン節で賑わったかつての漁村では、鯨場音頭として復活させようと努力しましたが、指導者や後継者のいないこともあって、その後の活動があまり見られません。

古平でも一時期、このような団体が作られました。が、残念ながら何時しか立ち消えになってしまいました。

⇐ 古平湾内での沖揚げ ⇐



以前は、美声で、自分でも歌詞を作ってはよく歌う若松定衛さんがおられて、生前には民放テレビ局で収録に来たこともありました。が、今では、当身を体験し、雰囲気再現して歌う人もいなくなりました。

← (次ページ下段へ続く)





# 法華洞にヤマセと避けて弁財船

漁業が大きく発展し、それにつれて海運業も盛んになってくると、安全に船が停泊できる港の建設が古平にとつての急務となっていました。その後築港が出来るまで、丸山岬に抱えられた古平湾が天然の良港として船の往来で賑っていました。

明治以前は今の丸山の崖下が深い入り江になっていて、強い北西からの季節風をさえぎり好適な停泊地でしたので、丸山町の山側にはベンザイトマリと言われていました。古平の東側は海が開けていてヤマセ（東風）・ミナミヤマセ（南東風）が吹くと船は難波するのが常でした。

そんなとき、モッコ岩から沢江村海岸にかけて弁財船が避難していたといいます。

ホッケ潤の語源はよく分かりません。ただ、鯨漁の終わりがから建網にホッケが大量に入りますが、これは鯨の数の子を餌に寄って来るもので、ときには、汲み船にも使われる三半船

（きんせ）で何隻分も獲れることがあります。沢江村沿岸は鯨の好漁場でしたからホッケもたくさん獲れ、それで名づけられたとも考えられます。

この時期のホッケは小形で身が細かったので、古平では「ローソクボッケ」と言つて主に魚粕にしていました。一般の家庭ではぬか塩漬けにしたりして不時の食料としていました。

ホッケ潤と言われるようになったのは何時ごろかはつきりしませんが、明治十八年の古平郡地図にはホッケ潤とあります。

また、現在の沢江町は古くはメナシ・トマリと呼ばれていましたが、これはメナシ（東風・トマリ）舟のかかる入り江という意味とされています。

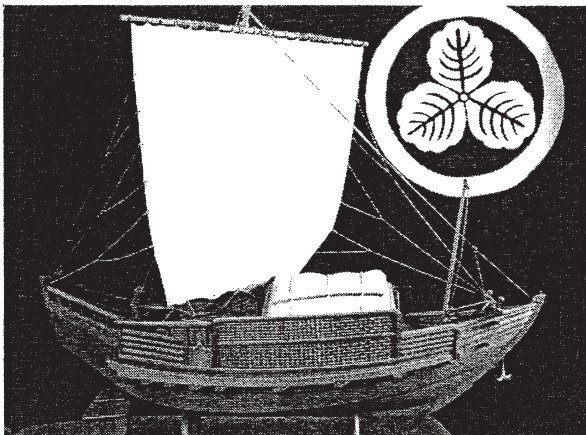
帆で走る弁財船の航行は風だけが頼りで、自然の入り江や潤だけでは、いったん海が荒れるとそれは悲劇でした。

明治七年十月、全道規模で襲

った暴風により古平湾内でも二九隻の弁財船が破船し、九名が溺死するという遭難事故がありました。この船主のほとんどは本州で、当時、利益の多かった北海道と交易のために、文字通りの「板子一枚下は地獄」の命がけの航海をして来たのです。

その後も漁業は飛躍的に発展し、古平に避難港をかねて築港が完成したのは昭和八年のことでした。

「弁財船模型、展覧会で二位入賞・宮田量市さん所蔵」



（前ページより続く）  
ヤーレン ソーランソーラン  
ハイハイ

\* 沖の鷗に潮時聞けば、

わたしや立つ鳥波に聞け

チヨイ、

ヤシャ エーエンヤアンサノ

ドッコイシヨ、

アードッコイシヨ、

ドッコイシヨ

\* ソーラン節には定まった

歌詞というものがなく、\*の二

行の歌詞を自由に入れ替え、機

転の利く漁夫などがあると言葉

を巧みに歌い込んで、作業中の

士気を盛り上げたといえます。

ソーラン節のかけ声も各地で

少しずつ違っていて、歌詞の方

言も北陸地方と青森地方の二つ

に大別されると言います。元唄

は、青森県野辺地周辺の木遣唄

（きやりうた）ではないかとも言わ

れ、前に古平町でも公演された

ことのある伊藤多喜雄さんも、

唄の調子が南部

か津軽地方のも

のによく似てい

るようだと言



1/20 時化で、余市通いの豊丸に積んだ荷物を沢江で下ろすとのこと、夜、金物店を開店することについて話し合う。

1/21 昨日からの吹雪と時化で、この二、三日で町中に雪の山ができた、寒さも厳しい新聞も郵便も止まったまま、余市にも新しいお得意さんができて、早朝から電話で交渉がある、今年に入り、小樽へ余市間の船便が三回ほどしか通わず不便で困る。

1/23 刺網の客が朝から切れない、貸して千六百間、現金で三百間程売れた、美国、余市から千間、二千間の交渉がある、昼ごろ〇から三人が来て、大謀網の計画があるので一株千円で加入を勧誘された、一株加入することにした、漁網、漁具の交渉についても依頼された、漁網の手配で金沢・四日市・東京へ出る予定だったので好都合だ。

2/11 今日には紀元節で、今年は憲法発布三十年に当たる九時からの式に参列する、十一時半から学芸会があるが、昔の

子どもより話し方もずい分うまくなった、夜、刃で火防組合役員の選挙があるので行く、組合長に困主人が選ばれた。

2/13 網が品不足気味になってきたようだ、先に買い付けに行つて持ち手が七万間程ある、先安と見て、買い控えていた者が多かったのだ、このところ客が来るワ来るワ、大忙しである、この辺りでは商売も独占状態になった。

2/14 七時ころには、早くも入舸から刺網を買いに来た客がいる、余市・美国からも電話で注文がくる、目の廻るような多忙さだ、品物が不足だと言うことで、品物の良し悪し、値段どころではないといふので、押んで買つて行く、他のところが先安の見込みで買い控えたのが、商売にとっては誠に幸運であった。

2/16 水産講習会へ行つて見る、内容はホッケ・サバ刺網についてであった、そのほか改良川崎船についての話もあった。

2/17 積丹からカスベ漁

の綿糸、アバ縄などの客が来て大忙しであった、細アバ縄などはまだ新しい品で、どこも売っていないので商売は独り舞台である、余市・美国からの注文だけでも一万間以上ある、三月十日ころまでには、これから四万間が出るだろう、売れ残つても七、八千間ぐらいだろう、余市通いは今日も休みで、九日からもう八日間も欠航している、これでは実に不便だ。

2/18 小春日和のような天気だ、子どもたちは浜に出て遊んでいる、役場で農会の総会があり行く、過日、買い付けに行つた網の出荷案内がまだ来ない、今来れば売れ行きが良いとさなの困つたものだ、余市通いは今日も欠航、実に不便だ、青エンドウ一俵十二円、でん粉十円、高値の時から七、八円の暴落である、持つていて相当に損をした人もいふようだ。

2/21 春らしい天気で、カレ網も出た、このころはスケソが大漁で、カレ網は少ししかかからなくなったそうだ。

2/24 小樽からの帰り、

梅川町の久末さんに寄りいろいろ話をする、改良網の出来が良いので、今後も頼むとのこと、今年の鯨漁でも良ければ、この秋に大々的に宣伝しよう、富沢町にも寄り、カレ網など千二百間程の注文を受ける。

2/24 今年にはカレ網が全般に好漁で、余市は七人乗り十四、五隻、出足平は七、八隻、島泊は磯舟、ホツツ船で十隻、三十人、湯内は磯舟で十五、六人ぐらいのことだが、一人に付き二百円から四百円ぐらいにはなつたという、今秋は勉強さえすれば、相当売れ行きは良いだろう。

3/2 網も品切れのものがあつて、問屋からはまだ届いていない、余市も小樽も皆品切れとのこと、今あれば飛ぶように売れるだろうに仕方がない、綿糸類は値上がりし、白米は下落した、相場の先行きは全く分からないものだ、客からは刺網の問い合わせがひっきりなしにあり、返事に困る。



3/4 浜ではあちこちで

雪を切り、船を出しているのが、鯨場らしくなってきた、郵便局に寄ったら、余市では小包などの袋が二百個もたまっているとのこと、船で一、二時間のところなのに不便極まることだ、今日もカレ網は三百貫も漁があったといい、サメ、タラも沢山揚がっている、午後の末広丸で、小包で送ったという刺網が五十個程着いた。

3/5 朝から刺網の客で

店はいっぱいだ、小樽税務署から営業税調べにきた、昨年より漁具商などは六割増しとのこと、届け出の金額を訂正した、昨年より確かに売り上げも増えたのだから、これも仕方がないだろう。

3/6 快晴、天気は春景

色となった、早朝からの客で今日も忙しい、小包を局に問い合わせたら、ちょうど豊丸で行囊（こうのう）が五十個届いたのだ、その中にあるだろうとのこと、袋に三十六個の小包が入っていて、夕方までに大半が売れた、夕方になり、局からまた小

包五十六個が着いたとの知らせがある、これだけあれば先ず品切れはないだろう。

3/7 店から茶の間から

網を見る客でいっぱいだ、他に建網用のアバや合羽（かっぱ）を出して、まるで正月二日の売り出しのようである、何しろ全道的に品物が無いのだから、この売れ行きである、今までのこともあるので余り値上げも出来ない、商売もこんなに繁昌すればおもしろいものだ、夜も静かな天気だ。

3/10 学校では陸軍記念

日で雪合戦があるという、二時ごろ見に行ったが、一丈五尺程（四五尺）もある城をこしらえていてなかなか勇ましい。

3/16 刺網の方は一段落

したが建網関係の漁具が出る、ボイル油、ヒ皮、合羽、綿糸、ミゴ縄などが売れる、刺網の規制問題があり、建網は一間も沖出しが出来ないという、沢江では二、三日前からガンジ網をやっているが、近年稀な程の大漁だという、この分だとまた網が売れるだろう。

3/17 鯨漁業者の紛争、

軋轢（あつれき）はますます甚だしく、美国では特に激烈で、円満な解決はとうてい望めないということだ、刺網業者は従来通りの刺網の黙認を建網業者側に願ったが、絶対に受け入れられないということなので、刺網業者一同が集合して善後策を協議したが解決策がなく、支庁を経て道庁に嘆願することになったとのこと。

3/18 建網業者も刺網業

者も、漁業規則の励行を嚴重に取り締まるということで、ビクビクものだ、建網は二十五日まで建て込みが出来ないと、業者は困っている。

3/19 諸物値まします下

落する、中でも金物、衣類、雑穀、でん粉などが甚だしく、畑方面や農園では大打撃だ、綿糸などは逆に二割程も値上がりしている、相場というものはわからないものだ。

3/20 刺網の規制問題が

やかましくなつて、それが建網業者にも影響を及ぼし、まだ一カ所も投網していない。

3/29 夜明けから雪に

風がついて時化になり、網を揚げたところもあるという、困の群来村の漁場で、磯舟に二隻程の鯨をとる、古平としての初漁一番だ、十尾程初鯨を貰い夕食に食べたが、本年の初物、古平でもまだ多くの人は初鯨を食べてはいないだろう。

3/30 天気は快晴だが

寒い、種田、八で磯舟一隻分程とったという、余市から荷物が来ていると通知があったが、解（はしけ）も馬車もないという、泥の木歩方に頼み一個十五銭で運んでもらう、えびす倉に入れたが六百円程の荷物だが、ずい分と揃った、浜に出て見ると、つぶ買いの汽船三隻、帆船二隻が入港している、建網も昨年から見るとずい分陸に近い、鯨漁を迎えて浜の景気は実に良い。

3/31 午後リングの枝

切りをする人が来る、百五十本を十日間でやるということ、二十円に決める。

（以下 次号）

# 孫

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)



昨年十一月の事。

妻が

「孝ちゃん(孫・孝文・七才)が神棚に手を合わせ、何やらブツブツ言ってるんだけど」と言う。

我が家では、神棚を拝むのは正月の数日だけなのに、幼い孝ちゃんが、毎日鈴を鳴らし拝んでいるのは変だと思い、孝ちゃんに聞いてみた。

「うーんとネ。おじいちゃんが何時までも元気でいられるようにって、神様をお願いしているの」

との事だった。私(七十才)は、孫の中で一番幼い孝ちゃんを殊の外可愛いがり、暇を見つけては、野球やサッカーを楽しみ、魚釣り・メ

ダカ・ドジョウすくい・カニ捕り・昆虫採集・竹とんぼ・ガワ回し等、自然とのふれ合いに興じているが、ある日の事、添い寝をしていた孝ちゃんにフザケ半分こんな事を言った。

「孝ちゃん。大きくなったね。でも、孝ちゃんがもつと大きくなってお嫁さんをもらうまで、おじいちゃんが生きていられるかねエ」と。

カラカイとも知らない孝ちゃんは真剣だった。

「おじいちゃん。そんな事いわないで。何時までもボクと遊んでくれないかダメ。おじいちゃんの言う事なんでも聞くから、ずっと遊んで。ねエ、いいでしょう」



意外な反応に当惑した私は「そうか。じゃあ、もつともつとおじいちゃんになるまで元気でいるからね」

「ボク、神様をお願いする」

「そうか。でも、一回だけお願いしても、神様は聞いてくれないかも知れないヨ」

「じゃ。何回お願いすれば聞いてくれるの」

「一〇〇回もお願いすれば聞いてくれると思うよ」

「ボクする。おじいちゃんとずっと一緒にいたいから一〇〇回する」

こんなタワイのない会話をした事など、とうに忘れていた私なのに、孝ちゃんは誰にも言わずに実行していたのである。

あまりにも純な心に、私は年甲斐もなくウルウルになってしまった。

「孝ちゃん、ありがとう。おじいちゃんねえ、この頃元気がなったと思ったら孝ちゃんがお願ひしてくれたからなんだね。何回お願いしたの」

「今日で十二回目だよ」

「一〇〇回も続けてくれる」

「うん。続ける。でも、おじいちゃんのことをお願いしたあとで、家のみんなも元気でいられるようにってお願いしてるんだけど、神様は二つも聞いてくれるかなア」

「孝ちゃんのお願ひなら、何でも聞いてくれるよ」

齢とともに涙腺が退化した私は、汚れを知らない孝ちゃんの心に、目頭が潤んでしまった。

恥ずかしながら、熟年の域に籍した私が、忘れかけていた

・人を信じる心

・人を思いやる心

・人をいたわる心を、頑固な孫に甦えさせられたのです。

二月四日。一〇〇回の満願を果たした孝ちゃんに、心から

「ありがとう。孝ちゃん」と言いながら、思いっきり抱きしめた。



# 霊場

## 古平の名勝地

< 11 >

### 観音はものがたり

△先号から続く▽

観音像を寄進した人たち

【第十二番】 千手観世音

昭和十一年十月十七日

禅源寺地藏堂横

野藤とよ・熊合リコ・出崎富代

土野はつ・藤井きよ・的場はる

横田リカ・横田勝治・中島千代

浅野とめ・杉山さん・菅原もと

小平トキ・真田さだえ

【第十三番】 二臂如意輪観世音

漁夫 供給組合

昭和八年八月二十七日

禅源寺鐘楼後ろ

当時、主にカムチャッカ方面

の鮭漁へ出稼ぎに行っていた人

たちが、海上安全と大漁を祈願

し奉納したものです。

【第十四番】 如意輪観世音

中 中村 吉蔵

昭和九年十月十七日

禅源寺地藏堂横

【第十五番】 十一面観世音

西島家で毎年七月十日・

十月十八日の二回供養

【第十六番】 揚柳千手観世音

寄進者・所在共に不明

【第十七番】 十一面観世音

慈眼会

昭和八年八月二十七日

禅源寺鐘楼後ろ

【第十八番】 如意輪観世音

昭和九年十一月二日

禅源寺鐘楼後ろ

山田勇三・竹内□□・佐藤亀三

郎・仲寛谷常□・浜辺松太郎・

大槌藤治郎・戎市太郎・福嶋勇

作・斉藤助蔵・浜口末蔵・奥野

福松・山田要・伊藤文治郎・高

橋□□・沢田兼太郎・長谷川松

五郎・柴田□□・富本タケ・浅

野豊吉・小枝末八 以上二十人

【第十九番】 千手観世音

寄進者・所在共に不明

【第二十番】 千手観世音

北浜嘉雄

画像で自宅に安置

昭和二十八年

【第二一番】 聖観世音

公園部落会

昭和八年八月二十七日

鴨居木・地神碑前

小野寺スエ・小野寺キツヨ・若

山クニ・小野寺アキ・石岡マキ

・渡部ミヨキ・菊地イツ・堀ヒ

デ・小野寺トヨ・阿部クニ・上

野ハツ・末政ハル・小野寺フユ

・武川雅雄・斉藤積・土岐ハツ

・田中イチノ・相良ハル・金子

コウ・小野寺スミ・沢口ツトエ

・川村ミサ・小野寺ツル・武川

ミヨ・酒井チヨ・小澤タカ・若

山フミ・三宅マス・大久保ハル

・柴田ヤイ・藤田イマ

【第二二番】 千手観世音

青山雅雄

魚籃観世音も同時にチョベ

タンの沢に安置

昭和二十八年五月十七日

【第二三番】 千手観世音

寄進者・所在共に不明

【第二四番】 十一面観世音

寄進者・所在共に不明

【第二五番】 十一面観世音

寄進者・所在共に不明

【第二六番】 千手観世音

寄進者・所在共に不明

【第二七番】 如意輪観世音

寄進者・所在共に不明

【第二八番】 聖観世音

禅源寺老婆連中

昭和七年十月二十七日

【第二九番】 馬頭観世音

鴨居木御詠歌連中

昭和二十九年四月三十日

明和集会所横

【第三十番】 千手観世音

寄進者・所在共に不明

【第三一番】 聖観世音

永井ハツ

昭和九年十月十七日

【第三二番】 千手観世音

新地方面御詠歌連中

昭和十一年十月十八日

祝聖会

昭和六年十月十七日

禅源寺鐘楼後ろ

― 続く ―



# 古平町岬短歌会 一月詠草

満ちたりし日々もはるけく吾子五人通ひし学校の閉校を聞く

東 美知

工事中の電柱にのぼる電工は電線の大きな輪を肩にかけをり

竹内 こと

長崎さんの描き呉れし吾の肖像画留守せる家を守るがに在り

池田 テル

新春に活くる花材も様変るカラーガーベラ寒椿など

田中 香苗

ケーキ入刀の二人の笑顔写る賀状に好青年の縁早きを知る

榎 佳代

宇宙にて二〇〇一年迎ふるとその一瞬を孫と飛び上る

鈴木 時子

新年に孫の呉れたる厚き文直してといふ短歌ずらりと並ぶ

奥山 きよみ

バス停に止りて開くるドアより吹雪舞ひくる客より早く

丹後 初江

常よりも流水早しと海写すテレビを見つつ温き餅食む

堀 典子

還暦を迎へし姉にと安住の地を購ひて心足らへり

魚屋 友子

降り止まぬ雪に風つき暗みゆく部屋を灯して又賀状読む

山口 スエ



## 古平ホトトギス会

故郷の助役勇退春寒し 斉藤波留

わくくどとハリーポッター二月尽 山口悦子

いじらしき俳画の友よ寒雀 越野敏雄

着膨れて千代紙折に没頭す 大和田絵伊

靴あとを一步くと雪の道 福井幸平

雲切れ間光こぼれて月冴ゆる 関口勝志

軒つらゝ大きく育ち地にさゝり よしざきり

白帽子解けて真つ赤なナナカマド 仲谷比呂古

凍江の猛威を奮ふ風は海 越野清治

地吹雪に街の灯も見えかくれ 室谷弘子



石井 愛子

事故がおきハワイ沖船沈み御家族わ

子の電話嬉しく聞こゆ爺と婆

しばれるが相撲の激戦熱くする

× × × × ×

新聞でもニシンが話題になる時期になりました。今月号はそのニシンを八ページ特集しようと考えていましたが、準備が不十分で、高野名幸作さんの日記を増ページしました。寒さはまだ続きそうですが、光りは春を感じさせます。